



令和六年度

第四十回 青少年の主張矢祭大会

作文集

矢祭町青少年育成町民会議



開催趣旨

矢祭町は、「元気な子どもの声が聞こえるまちづくり」を基本理念に掲げ、行政、議会、町民がそれぞれ

の役割を果たしながら、独立独歩のまちづくりを進めていくことを誓っています。恵まれた自然環境の中で、夢を持って子育て・子育てが出来る風土

こそが矢祭町の誇りであります。

青少年の主張大会は、矢祭町の未来を担う子供たちが、自分たちの抱える未来への想いを発表する場です。その強い想いを、行政、議会、町民がそれぞれ真摯に受け止め、これらからのまちづくりに対する責任を再確認する場でもあります。

未来を担う子どもたちの成長を見守りながら、これからの矢祭町に思いを馳せる、そんな場になって欲しいと願っています。



【目次】

第四十回青少年の主張矢祭大会

「小学生の部」

◎最優秀賞

☆ぼくを変えてくれたもの

矢祭小学校六年

寺島 颯希・・・4

○優秀賞

☆矢祭町をスポーツの町に！

矢祭小学校五年

鈴木 海音・・・6

☆よりよい矢祭町にするために

矢祭小学校五年

鈴木 柚依奈・・・8

☆よりよい社会のために

矢祭小学校六年

金子 友希・・・10

「中学生の部」

◎最優秀賞

☆宝の地図

矢祭中学校三年 深谷 凜・・・ 12

○優秀賞

☆いつか兄貴を超えてやる

矢祭中学校一年 本田 瑛士・・・ 15

☆群青が教えてくれたこと

矢祭中学校二年 菊地 心絆・・・ 17

「高校生の部」

◎最優秀賞

☆矢祭町の活性化

学校法人石川高等学校二年 近内 彩花・
・
・ 20

○優秀賞

☆未来を紡ぐ日々とふるさとの夢

福島県立修明高等学校一年 増子 冬香・
・
・ 22



最優秀賞

ぼくを変えてくれたもの

矢祭小学校 六年 寺島 颯希

「ぼくは運動が苦手で、自信がない。」

これが以前のぼくの本音でした。みなさんにもきつと、苦手なものや嫌いなものがあると思います。ぼくは「運動」が苦手です、正直あまり好きではないと思うこともありましたが、特に、走ることに対する苦手意識があり、運動する時間が楽しいと思うことはあまりありませんでした。周りの友達と自分を比べてしまうこともありましたが、劣等感があり、「苦手なんだから、しょうがない。」と、心の中で諦めている自分がいました。

そんなぼくを変えてくれたものがあります。それは「総合運動教室」です。矢祭町には、地域おこし協力隊という方がいら

っしゃいます。「総合運動教室」とは、その地域おこし協力隊の鳴瀬さんがやってくださっている放課後の運動教室です。基本的には、陸上やマラソンなどの練習です。その他にも、休日に「アスレチック教室」や「朝ラン」などを開いてくださっています。

六年生になり、この「総合運動教室」の案内が来た時、ぼくは参加するかどうか、迷っていました。「運動が苦手だし、ついていけるのだろうか。」「練習がきつかったらいやだな。」「途中でやめなくなったらどうしよう。」などと、悩んでいました。そして、その結果、結局ぼくは運動教室に参加することにしました。お母さんと友達から勧められたのが理由でした。最初はあいまいな気持ちで始めましたが、ぼくにとってその活動は、とてもかけがえのないものとなりました。その中で、たくさんを経験して、たくさんを感じることができたからです。

まず感じたことは、「粘り強く最後までやり抜くこと」や「努力すること」の大切さです。運動教室では、楽しいことだけでなく、つらくて苦しい時もあり、途中でやめなくなったり、逃げ出したくなったりすることがありました。でも、「せっかく入ったのだから、頑張りたい。」と、苦しい練習にも一生懸命取り組みました。その先には、ものすごい達成感がありました。速

さや順位に目が行きがちですが、自分自身と戦いながら「自分の中で頑張る」ことを意識して取り組みました。もちろん毎回、自分自身が満足いく内容となったわけではありません。がんばってがんばっても、結果がともなわず、悔しい思いをすることもありました。しかし、そこでがんばったこと、がんばれたことが自分の自信や糧となりました。また、担任の先生から「颯希くんの本気でがんばる姿には、いつも感動しているよ。」や、他の先生からも「いつも頑張っていてすごいね、勇気をもらえるよ。」などと、声をかけてもらえることもありました。ぼくの取り組んでいる姿で、何かを伝えられていることにも気づきました。次第に、自分と周りを比べることが減っていききました。そうやっていくことで、純粹に運動することを楽しめるようになっていきました。

また、運動教室に取り組む中で、改めて「仲間の大切さ」が分かりました。辛いことや苦しいことなど、何かあれば、仲間が励ましてくれたら、仲間が頑張っている姿を見て、刺激を受けたりしました。お互いに切磋琢磨して、どんなことも乗り越えることができました。ぼくにとって「仲間」の存在はとても大きいです。お互いに高め合える大切な存在です。こんな仲間に巡り合えたことに感謝しています。

そして、ぼくは、この総合運動教室を通して「運動する楽しさ」を実感することができました。「苦手だから楽しくない」ということではなかったのです。「勝ち負け」や「速い遅い」「できない」だけが運動やスポーツの魅力ではなく、気持ちの持ち方や考え方次第で「楽しさ」が変わってくるということが分かりました。

僕にたくさんのことを教えてくれた「総合運動教室」。その「総合運動教室」があったからこそ、今の僕がいます。誰にでも苦手なものや嫌いなものが必ずあると思います。でも、そこから学べることもたくさんあることを知りました。確かに、得意なものや好きなものを伸ばすことも大切ですが、自分の苦手なものや嫌いなものに目を向け、向き合うことで、かけがえのないものを手に入れることもできるのです。こんな僕を変えてくれた「総合運動教室」、そして、そのような機会を提供してくださった矢祭町には感謝しています。その感謝の気持ちを胸に、これから運動を楽しんでいきたいと思っています。



優秀賞



矢祭町をスポーツの町に！

矢祭小学校 五年 鈴木 海音

私はスポーツが大好きです。特にサッカーや陸上、駅伝をがんばっています。友達はバスケットやテニス、スイミングなどに夢中です。普段は、町営グラウンドでサッカーの練習をしたり、雨の時や冬場は体育館で練習をすることもあります。陸上の練習では、小学校のグラウンドで練習したり、雨の日は体育館で練習をしたりしています。そして駅伝では、毎年恒例のふれあい駅伝に向けて、校内マラソン記録会や休み時間のマソントイム、河川敷を使つての練習などに取り組んできました。私の周りにはスポーツが溢れています。

私には大きな夢があります。それは、サッカー女子日本代表、

なでしこジャパンに入り、世界で活躍することです。今は矢祭町の男女混合チームに入っています。先日、サッカー元日本代表のラモス瑠偉さんが私たちのチームにやってきました。ラモス瑠偉さんは現役を引退した後、解説の仕事や子どもたちへの指導にも力を入れてくださっている方です。ラモス瑠偉さんにサインをいただけただけでもうれしかったのですが、試合を見てたくさんアドバイスをいただきました。ラモス瑠偉さんとはとてもやる気を引き出すのが上手な方でした。ラモス瑠偉さんのことを調べてみると、過去のインタビューでこんな言葉を残していました。「リーダーは口だけではなく行動で見せないといけない」とても説得力のある言葉だと思いました。私は今、矢祭町の少年団のチームで副キャプテンを務めています。これから先を見据えて、言葉だけではなく、行動に表し、背中で仲間を引っ張っていきけるようになりたいと思います。そしてリーダーとして、キャプテンとして、いつの日か日の丸を背負って戦いたいのです。

私は五人兄弟の末っ子です。すぐ上には六年生の兄がいます。兄も同じスポ少に入っていますが、六年生が一人しかおらず、試合に負けてしまうことがあります。しかし兄は、サッカーが好きなので諦めたりやめたいといったりしたことはありません。

中学校の姉も、チームの中で女子は一人なのですが、男子に負けがانبわっています。姉とさらにその上の兄はふくしま駅伝に参加しています。距離が長い分、私からするとどうやってそんな長い距離を走れるんだらうという気持ちですが、諦めずがんばっている兄と姉はすごいです。私はそんな兄と姉たちを尊敬しています。

私は、矢祭の少年団だけではなく、県南の女子チームにも所属しています。ただ、須賀川市や天栄村など、遠いところからも集まってきたので、練習はたまにしかできません。サッカーはコミュニケーションがとても大事なことで、短い時間ですが、積極的にコミュニケーションをとることを心がけています。私はもともと人見知りをしてしまうほうだったのですが、サッカーを始めたことをきっかけに、たくさんコミュニケーションをとることを覚え、初めての人でもコミュニケーションが取れるようになってきました。ここが自分で一番成長したところだと感じています。自分から積極的に声をかけることで自信がつき、他の人に教えてあげたり、いい雰囲気を作ったりできるようになってきました。初めのうちは、とても不安でしたが、今は勇気を出してよかったなと思います。これからもコミュニケーションの大切さを忘れずにいたいと思います。

私がスポーツを通じて学んだことは、私たちはコーチや監督、チームの仲間や家族の支えがあったり、地域の人たちが応援してくれたりしているからこそ活動できているんだということです。チームがなければどんなにサッカーが好きでもプレーすることはできません。矢祭町にサッカーのチームがあること、そして私たちの活動を支えてくださっている方々への感謝の気持ちを忘れずに活動していきたいです。その上で、私は矢祭町がもっともっとスポーツの盛んな町になっていくってくれたら嬉しいなと思います。町民の一人一人が好きで興味のあるスポーツに親しみ、みんなが健康で元気に過ごせるように、自分の大好きなスポーツで溢れる矢祭町になってほしいです。私ができることは少ないかもしれませんが、自分の活動やプレーに集中して、一生懸命取り組むことが、矢祭町のスポーツを盛り上げることに繋がっていくと思います。これからの矢祭町や自分の成長のためにも、日々の取り組みに全力を尽くしていきたいです。スポーツと笑顔が広がる矢祭町の未来のために。





優秀賞

よりよい矢祭町にするために

矢祭小学校 五年 鈴木 柚依奈

みなさんは、矢祭町が好きですか。矢祭町のみ力を言えますか。私たちの住んでいる矢祭町には、矢祭山、戸津辺の桜、アユのつり橋、滝川溪谷などの自然がたくさんあります。そして、イチゴ、ユズ、花、米、野菜などの農産物も豊富です。また、もったいない図書館、ユーパル矢祭、スインピア矢祭などの施設もあります。私はほぼ毎日のようにスインピア矢祭で水泳を指導してもらっています。時々、泳いだ後ユーパル矢祭でお風呂に入って帰るのも楽しみの一つです。

これだけを考えてみても、矢祭町の魅力はたくさんありますが、もう一ついいなと思っていることがあります。それは、年

に一回十五夜の日に、子どもたちが近所の家を回ってお供物のお菓子などをいただく「お月見どろぼう」です。「お月見どろぼう」はこの辺でしか行われていないことを聞いてびっくりしました。この風習があるおかげで、近所の方たちともつながりをもつことができ、いいなと私は思っています。

そんな良いところがたくさんある矢祭町ですが、私は心配していることがあります。それは、年々人口が減っているということです。特に子どもの数が減っているなど感じています。私たち五年生は二クラスあり、五十二人と矢祭小学校の中では一番人数の多い学年です。しかし、他の学年は、これより少なく、中には一クラスの学年もあります。私が大人になる頃には、子どもの数がどのくらいになってしまうのかと心配になります。私たちにも何かできることはないのでしょうか。

私は五年生になり、総合的な学習の時間で、二月に「子ども議会」というものが行われ、そこで五年生が代表で矢祭町をよりよくするための提案を知りました。これまでの五年生の提案で校庭にターザンロープができたり、期間限定でスイーツが販売されたりしてきました。子ども議会はよいチャンスだと私は思いました。

それから五年生は、矢祭町の良さとこれからの課題について

考え、三つの考えにたどりつきました。

一つ目は、自分たちが調べていくうちに気がついたことです
が、矢祭町に住んでいる私たち自身が矢祭町のことをよく知らないのではないかと、二つ目は、矢祭町に来てくれる人を増やし、住んでみたいと思わせることができないかということ、三つ目は、矢祭町に今あるものや、住んでいる人たちを活かして町のアピールができないかということです。

私は、この中でも三つ目の課題について考えてみました。私の考える案は「宿泊学校」を作ることです。以前矢祭町には五つの小学校がありました。その小学校の中には、別の施設として利用されているところもありますが、まだ残っている小学校を利用して、家族や多くのグループが宿泊できるような施設にできないだろうかと考えます。学校の雰囲気そのまま残しつつ、教室を泊まれるところにしたり、家庭科室だったところで調理をして、食堂のようになりたりしたらどうでしょうか。前にテレビで廃校になった小学校を利用して給食メニューを提供したり、宿泊もできたりするところを見たことがあります。矢祭町にもそんな施設があったら、住んでいる人たちも利用したいなと思うし、働く場所もできるのではないのでしょうか。皆さんの中にも「学校にみんなで泊まれたらいいのにな」と思ったことの

ある人もいます。

これを実現するにはいろいろな課題があるでしょう。しかし、私の大好きな矢祭町がもっと良くなるように、二月の子ども議会に向けてみんなで考えをまとめていきたいと思っています。私たちのふるさと「矢祭町」の未来のために、私たち子どもにもできることがあるのだと信じて・・・。



優秀賞



よりよい社会のために

矢祭小学校 六年 金子 友希

「差別」それは、合理的な理由なく、人権を踏みにじることです。みなさんも一度は、「差別」という言葉を聞いたたり、または、身近に感じたりしたことがあるのではないのでしょうか。「差別」には、「人種・部族による差別」「性別による差別」「障がいの有無による差別」「感染症患者への差別」など様々なものがあります。今、世界で取り組まれている「SDGs」にも、差別についての課題があります。SDGsの目標10の「人や国の不平等をなくそう」にて、すべての人が生まれや性別、宗教などに関係なく平等に生活できることを目指し、世界全体が取り組むべき問題として示されています。「差別」によって、心に深い

傷を負ってしまったことや生きづらくなってしまうこと、中には命を絶ってしまう場合もあります。「差別」とは、私たちにとっても身近な問題であり、私たち一人一人も考えていかなければいけないことだと思えます。では、なぜ「差別」が起きてしまうのでしょうか。私は、「偏見」：偏ったものの見方や考え方による、勝手な「思い込み」や「決めつけ」が大きな原因であると考えます。

以前、「知らずに相手を傷つけてしまう マイクロアグレッション」という記事を目にしました。「マイクロアグレッション」とは、思い込みや偏見によって、無自覚に相手を傷つけてしまう言動です。例えば、「女性なのに、出世してすごいね。」や「新入社員にしては、いいこと言うね。」などが、このマイクロアグレッションにあたります。自分の日常生活を振り返ってみると、確かに思い込みによって、発言してしまっていることがあります。私の周りの友達優しい人ばかりですが、無意識のうちに友達を傷つけてしまっていないか、とても不安になりました。今、ネット上には様々な情報があり、私たちはすぐに多くの情報を手に入れることができます。しかし、その情報はすべてが真実というわけではなく、間違った情報も多く存在します。それにより、人を傷つけてしまうこともあるかもしれません。だ

からこそ、私たちはたくさん情報の中から、常に「この情報は正しいのか」と考えながら、正しい情報を選択していく必要があるのです。

そして、私の身の回りでも、「偏見」による「差別」があります。特に、噂から広まる「偏見」や「差別」を目にすることがあります。他人から、本当かどうか分からない話を聞き、その人に対して、勝手なイメージをもってしまうます。そこから、その人に対して、距離をおいてしまったり、態度を変えてしまったりしてしまうのです。その情報が本当かどうか分からない、そして、その人のことを知らうともせず、自分で勝手な判断をして、行動してしまっています。これも、私の身の回りにある一種の「偏見」による「差別」です。周りの情報に流され、その人のことを知りもせず、「勝手なイメージをもつて決めつける」というようなことは絶対にあってはならないのです。「みんな違って、みんないい」というように、一人一人、大切な「個性」があります。私は、その「個性」を大切にして、その人自身のことをもっともつと知るべきであると思います。

このように、世界や日本、そして、私たちの身の回りには、まだたくさん「差別」があるのが現状です。無意識のうちに差別してしまっていることも多いのです。たくさん情報が

混在する今の世の中で、自分でその情報を鵜呑みにせず、判断する力が求められます。「知ること」や「学ぶこと」が、「先入観」や「固定概念」、「偏見」などの偏った考え方を改めることにつながると考えます。そして、私は根拠のない偏見にとらわれず、一人一人の個性に着目し、その人自身を知ろうとすること、それが「不合理な差別をしない、させない」ための第一歩であると主張します。みんなが生きやすい、よりよい未来の社会のために。





最優秀賞

宝の地図

矢祭中学校 三年 深谷 凜

みなさん、私たちの住む矢祭町に図書館があることを知っていますか。もちろんみなさんご存知ですね、そう、もったいない図書館です。では、もったいない図書館で本を借りたことがある、そして、頻繁に行くという方はいますか。普段の利用者を見る限りみなさん全員、というわけにはいかないと思います。もったいない図書館の存在を知っているのに、みなさんが頻繁に行くわけではないのは、いったいなぜでしょうか。それは簡単にいうと図書館だからです。もしももったいない図書館が、もったいない遊園地だとしたらどうでしょう。お子さんから大人の方、遊びにきた観光客で連日大賑わい。矢祭町はもったいな

い遊園地のおかげで大人気、なんてことになるでしょうね。ですが、矢祭町にあるのは図書館です。私が言いたいのは遊園地が欲しい、ということではありません。ぜひ図書館に来て本に触れて欲しい、ということです。

私は、小学四年生で子ども司書に認定されました。子ども司書というのは図書館の仕事や本に関する知識を一年間の活動を踏まえて学んだ人が認定されるものです。そして小学五年生で子ども司書から子ども読書推進リーダーになりました。その名の通り、読書を推進する子どものリーダーです。そして、去年、中学校に新しくできた特設図書館部という部活動に入部し、今も活動を行っています。つまり私は約六年間、図書館と関わってきたということになります。小さい頃からずっと本が好きで親しみを持っていたので、子ども司書に認定していただき、中学三年生になった今も図書館の役に少しでも立てていることを誇りに思っています。この六年間、本の良さを伝える活動を何度何度も行ってきました。ですが、あまり町の方々に伝わっていないように感じます。本の町矢祭と謳っているわりには、積極的に本に触れる人をあまり見受けられないのが現状です。本を読むメリットはたくさんあります。知識や教養が身に付いたり、語彙力・文章力が向上したりします。そして、いろいろ

な価値観を知ること視野を広げることもできます。私は、一歳にもならない頃から両親に、毎日のように絵本を読み聞かせてもらっていました。そのため、小学生になった時には本と触れる習慣がついていて、私はその頃からずっと本が好きです。覚えていた範囲で、私が人生で初めて読んだ本は、小学二年生の時の夏休みに読んだサン・テグジュペリの「星の王子さま」です。この本には、王子さまが自分の星を離れ、違う星を転々と旅していく場面があります。他人のために命令を出す王さま、酒を呑むことを恥ずかしがる吞助、数秒ごとに街燈を付けては消す点燈夫。星はみな一様に公転しているというのに、それぞれの星には全く違う誰かが住んでいるのです。小学二年生の私にはわからない描写がたくさんありましたが、今となって読み返してみると、いろいろな価値観を知り、自分の中で世界が大きく広がったからこそ理解できるものだったのだと感じます。今まで何百冊と本を読んできて、たくさんさんの知識や教養を学び、語彙力や文章力を得て、そしてさまざまな価値観に触れることで自分の中の視野が広がりました。自分と違う考えを持つ人がほとんどの世界でなんとかうまくやっていけるのはそのおかげだと思っています。本のメリットから得られるものはなにもそんな壮大なことだけではありません。例えば、本をたくさん読

むと必然的にたくさんさんの漢字や文法が目に入ってくるようになります。漢字や文法、単語、読む本によっては歴史や科学、数学など多くの学びにつながるのです。本を読んで楽しんでいうちに勝手にいろんなことを学んでいるのだと感じています。

このように、本には多くのジャンルがあり、それぞれ異なる良さをもっています。ミステリーやファンタジー、エッセイなどたくさんさんのジャンルがあるため、自分に合った作品が見つけられるはずです。とは言え、自分の力だけで本を開くのはまだ気が進まないと思う方もいるでしょう。だから図書館があるのです。私達には、行こうと思えばすぐに行ける場所に図書館があるではないですか。わざわざ書店に行ってお金を使わずとも、図書館に行けば何万冊もの本があります。きっと心惹かれる一冊に出会えるはずです。

図書館の本は全国から集められた寄贈書が多くを占めています。つまり、寄贈してくださった方々が好きだった本がこの矢祭町のもつたいない図書館に集められているということです。そう考えるととても素敵な場所に思えてきませんか？私がこの六年間関わり続けてきた、大好きなもつたいない図書館は、全国の方の思いに溢れているのです。たくさんの方に大切に読まれてきた本が自分の手の届くところにあって、いつでも手に取

ることができる、そんなもったいない図書館が私は大好きです。だからこそみなさんにはもったいない図書館の魅力に気づいてほしい。そして本を読むことの素晴らしさを実感してほしいのです。

最後に、かの有名なウォルト・ディズニーの言葉を紹介させていただきます。

「宝島の海賊たちが盗んだ財宝よりも、本には多くの宝が眠っている。そして何よりも毎日宝を味わうことができる」

夢の国ディズニールンドの生みの親である彼が語る、本の中に眠る財宝以上の宝とは何か。それは本の魅力に気づいた人にかわらないものです。ですから図書館に足を運び、本を手に取り、開いて、宝を見つけるための旅に、出かけてみませんか？図書館に行くことは、宝の地図を開くことと同じことなのです。





優秀賞

いつか兄貴を超えてやる

矢祭中学校 一年 本田 瑛士

僕は最近悩みがあります。小学生のころから運動が好きで、走り幅跳びをやれば自己ベスト、長距離を走れば自己ベスト。あの頃は何をやっても上手くいっていましたし、その後もずっとそうだと思っていました。

ところが、中学生になると状況は変わりました。四月のうちは調子もよく、今まで通り自己ベストが出ていましたが、七月ごろになるとタイムが下がり、とても自己ベストを出せるような状態ではありませんでした。

それがしばらく続いたことで、僕は自信を無くしてしまいました。「自分は長距離に向いていないのではないか。」「もっと違う競

技に転向すべきではないか。」そんなことばかり考えていました。幸い、相談に乗ってくれた顧問の先生の助言のおかげで、途中で投げ出すことはありませんでした。

落ち着き、前に進もうという気持ちがわいた僕は、どうすればまた自己ベストを更新できるのか考えました。そこで兄に相談することにしました。僕の兄はもともと長距離に取り組んでいました。練習には真剣に、そして全力で取り組み、その努力で結果を残しました。四種競技で東北大会に出場するという快挙を成し遂げた兄は自分にとって憧れの存在でした。

練習への取り組み方を聞き、僕はとても驚きました。まず、練習に対する考え方が大きく異なりました。とにかく自分を追い込もうと、できることは全部する僕と、必要な部分に必要な分だけ鍛える兄。練習メニューが違うだけだと思っていましたが、そもそもの考え方が全く違ったのです。

兄との違いに驚かされた後、兄から一冊の本を渡されました。陸上の本ではなく、SNSで有名なひろゆきという人の本でした。ひろゆきさんはこの本で「努力」について次のように語っています。「成功するためには大量の努力は必要なく、自分に必要なことを最低限することが重要なのだ」。この話を読んで僕はとても驚き、つい兄に「本当に信じてよいのか」と聞きました。

すると兄から、「本当だから。お前もやってみたら？」と言われ、僕は悩んだ末、勇気を出して試してみることになりました。

「必要なものを必要な分だけ」。言うのは簡単ですが、練習メニューの改良・開発などやることはたくさんありました。しかし、県南駅伝に出るころに徐々に効果を感じ始め、大会後、それは確信に変わりました。このやり方自分に合っていると。そして、それを教えてくれた兄に感謝しました。

兄とひろゆきさんに教わったことを実践しながら、自分の今までのやり方のどこが悪かったのかを考えました。そして、二つの反省点に行きつきました。

一つは、人の話をよく聞くことです。当時の僕はアドバイスを受けても面倒に感じ、てきとうに流していました。しかし、兄はそんなことはせず、どんな話もしっかりと聞いていたのです。

二つ目は必要なことを絞り、力を注ぐことです。一通りやってみようとする僕と違い、兄は自分の取り組む競技を絞り努力していたのです。

僕はこれから部活動も、それ以外も、努力が必要になった時、素直に話を聞き、自分に必要なものを見つけられるようにしたいと思います。自分一人で努力することはもちろんですが、周

りに助言を求めたり、手伝ってもらったりしながら、無駄なく自分を成長させたいと思います。

僕には夢があります。それは兄を超え、兄に「速い」と認めてもらうことです。そのためには兄に頼りつきりではいけません。僕は、兄に教わったことと、自分のこれからの努力をかけ合わせ、努力し続けることで、兄があつと驚くほど成長し、そして兄を追い越します。そのために今まで以上に努力し続けることをここに誓います。どうかみなさん、僕が兄を追い越す瞬間を楽しみにしてください。





優秀賞

群青が教えてくれたこと

矢祭中学校 二年 菊地 心絆

私の矢祭中学校での生活は楽しく充実しています。友達や先生方と過ごす矢祭中学校の生活が大好きです。今は、矢祭中学校で一番大きな行事である文化祭の準備を進めています。私はこの行事が特に好きで、中でも、合唱コンクールは大きな盛り上がりを見せます。まだ二年生の私たちですが、担任の先生は、最優秀賞を獲ろうと張り切っていて、熱すぎるなと感じる一方、先生に負けじと、私たちも本気で最優秀賞を狙って頑張っています。

そんな私たちが、合唱コンクールで歌う曲は『群青』です。授業で東日本大震災について学習した際に、担任の先生が紹介し

失ってしまった悲しみや、原発事故によって全国に離ればなれになった仲間への思いを込めて作った曲です。私は、震災当時、生まれたばかりで詳しいことを覚えていません。ただ、群青を歌うにあたって、震災について調べた際に、津波や原発事故で辛い思いをしている人が今もなおたくさんいることや当時は、学校行事や部活動が制限されるなど、当たり前前の日常が奪われたことを知りました。

私は、実際の東日本大震災を知らないものの、コロナ禍の生活に似たものを感じました。新型コロナウイルスが全国的に流行し始めたのは約五年前です。現在は五類感染症の扱いになり感染者も大幅に減少し落ち着いてきましたが、当時は対処法が見つからず世界的に問題となっていました。日常生活や学校生活が制限され、学校行事も次々と中止になりました。それだけではなく、大切な家族の命を失った方もいます。現在は、新たな常識とともに学校でも社会でも日常を取り戻しつつあります。群青の歌詞は、私に身に迫るものを感じさせ、当たり前前の日常がどれだけ幸せかということを改めて感じさせてくれました。

また、私は、群青という題名にも深い意味があると思っています。皆さんは、群青という色を知っていますか。群青色は、字の通り青が群がってできたより深い青色を指します。青色には

四十八種ほどの数があるそうです。濃淡それぞれの青色が集まって、互いの良いところを生かし、悪いところは補いながらより深い青色を作っているのです。なんだか、私のクラスに似ているなど感じました。私のクラスの学級目標は「一致団結」です。目標に向かい、一丸となり協力し合うという意味が込められています。学級目標は学活の時間にクラス全員で話し合い作成しました。私たちのクラスは、どの授業でも話し合い活動が活発に行われており、お互いの意見を聞き合って、協力しながら課題を解決しています。もちろん、行事の際の団結力もどのクラスにも負けません。クラスみんなで協力しあう雰囲気は日常の中で感じられることが、私の学校生活の充実の理由なんだと実感しました。

私は学校生活の中で、クラスメイトの話を聞くことやみんなと協力し何かを行うことは当たり前だと思っています。多くの人がそう思っているはずですが、しかし、そうではない場合も現実にはあるようです。その例として、いじめや差別の話を目にするのは皆さんもあるでしょう。矢祭中学校は、人権教育を推進しています。道徳の時間や町の人権擁護委員の方の講義などで人権について学び、相手の話を聞いてあげることや、挨拶などのコミュニケーションをとることなど、私たちにとって当

たり前に感じる事が人権を尊重することに繋がるということを学びました。人権尊重という難しいことのように感じますが、私たちが学校生活の中で行なっている当たり前が人権尊重に繋がっているということを知り、気持ちが楽になったように感じると同時に、私の学校生活が充実しているのは、学校全体で、人権を尊重し合っているからなんだと納得しました。

また、担任の先生から、矢祭町の皆さんが、会議で人権をテーマに話し合いをしていることを伺い、学校だけの取り組みではないことと、コミュニケーションという当たり前のように感じる事が、どの年代の人にとっても大切なのだと改めて学びました。人権の抱える問題には様々な種類のものがあります。解決がすぐには難しいものもあるでしょう。ただ、他者とコミュニケーションをとることが人権の尊重に繋がると考えると地域の皆さんといつも交わす挨拶も、矢祭町の人権尊重の意識を高めることに繋がっているのだと、学校生活で学んだことと地域社会の繋がりを感じ、大人に近づいたように思えました。

合唱曲『群青』は、私にたくさんのことを教えてくれました。ますます、気持ちを込めて歌えそうです。最後に、この曲は、「また会おう、群青の町で」という歌詞で終わります。皆さんがもつ青色を混ぜ合わせて、より濃い群青色の矢祭町になった

らしいなと思います。





最優秀賞

矢祭町の活性化

学校法人石川高等学校 二年

近内 彩花

現在、日本では二〇一九年にコロナウイルスが流行し始めてから収束しつつあります。今ではマスクを外し町を歩いている人が多く見かけられます。感染拡大初期の頃は、除菌やマスクの買い占めが多くみられ、品物が不足するということがニュースだけではなく私の身近でも起きました。また、医療現場で働いている人はPCR検査を患者さんに一日に何回もしなくてはいけないといったことが起きました。

私は、コロナウイルスによって本来の矢祭町がどこか欠けてしまったなと思いました。なぜなら、コロナウイルスによって

ボランティア活動がなくなり、矢祭町の盛り上がるイベントがなくなってしまうからです。行事が中止になってから矢祭町の人たちと話す機会が減り、以前のように関わるものが減ってしまいました。本当なら私も中学生の時、矢祭町のみなさんと一緒に二四時間テレビのチャリティー募金活動を行うはずでしたが、それもコロナウイルスの影響で縮小され行われました。コロナウイルスがなかったらと考えてしまうことがたくさんありますが、コロナウイルスによって気付かされたこともたくさんあります。いつも歩いている通学路で毎朝私より先におはようと元気にしてくれる方がいます。そのおかげで今日も一日頑張ろうと思えます。しかし、コロナウイルスが流行している時、その方もあまり外に出なくなっていました。その時おはよう。と元気に言ってもらえるのも当たり前ではないんだなと気付かされました。コロナウイルスが落ち着いた頃にその方が通学路を歩いているのに気づき、自分から元気におはようございます。とすることができました。その方は変わらず「おはよう。」と元気に言ってくれました。久しぶりに会うことができ、何より嬉しかったことは前のように変わらず挨拶ができたことです。また、今年は、コロナウイルスが緩和され、五年ぶりに天王祭が開催されました。朝から夜まで盛り上がり活気あふれる矢

祭町が戻ってきたなと感じることができました。

コロナが緩和されてきた今、私はコロナ禍前のような矢祭町の行事を盛り上げるための方法を考えました。その方法の一つとして福島県のゆかりのあるタレントにPRしてもらおうことが挙げられます。他にも、パンフレットを活用したり、ブログを開設したり、みんなが普段から使っているLINEに矢祭町の公式アカウントを開設してフォローしてもらおうといったことが挙げられます。

また、自分がFacebookやInstagramなどのSNSを活用してもっとたくさんの人に広め、さらに、矢祭町のたくさん子どもたちを集め子どもだけの神輿を作るなどの取り組みをしたら矢祭町がもっと活気づくのではないのでしょうか。コロナ禍前のように矢祭町みんなが健康で安心して暮らせる町にしていき、お祭りなどの行事に自ら積極的に参加していきたいです。これから小さい子から高齢者の方までたくさんの方の矢祭町の人と交流を深められればいいなと思います。





優秀賞

未来を紡ぐ日々とふるさとの夢

福島県立修明高等学校 一年

増子 冬香

みなさん、こんにちは。私は、修明高校の食品科学科の一年に在籍しています。私は食することが大好きで、おいしいものを食べている時が一番の幸せです。矢祭町にある「さがわ食堂」の醤油ラーメンが好きで大盛で二杯、食することができず。将来は食に関わる仕事に就きたいと考えて勉強や友達との関係、将来など、自分なりの答えを見つけることが現在の課題です。授業や実習などは時に面倒に感じることもありますが、自分がなぜ勉強しているかを考えると少し見方が変わります。勉強を通じて得られる知識やスキルは将来の自分にとって大切

な財産になるからです。また、友達やクラスメイトとともに過ごす時間は、協力することやコミュニケーションの大切さを教えてくれます。これらの経験は、社会に出てからも大いに役立つものだと思います。

私は以前、白河に住んでいましたが、三歳の時に矢祭町に引っ越してきました。「何もない」が最初の町の印象です。けれど今は違います。生活を通して、町のよさにだんだんと気が付いてきました。

自然が豊かで四季折々の風景が美しい場所がたくさんあります。春には山菜があります。「ばあば」が揚げてくれたふきのとうの天ぷらがおいしすぎて、一週間毎日食べ続けたことがあります。他にもぜんまいやたらば、こしあぶらなど。秋にはきのこ類と、季節によっておいしい山菜が変わり、食べるのが楽しみとなっています。

また、下校の時には、「おかえり」と声をかけてくれる町民のかたが多く、自分の家がたくさんあるように感じ、嬉しい気持ちになります。矢祭町は人の温かさであふれている町だと思います。

また地元の伝統や文化に触れることができる行事やイベントがあり、できるだけ積極的に参加したいと思っています。例えば

ば、天王祭や元氣祭などの行事に参加し、地元の人たちと一緒に楽しむことで、ふるさとの文化を学び、次の世代へと伝えていくことができると考えています。さらに、ふるさとの自然環境を保護する活動にも力を入れたいと思っています。地域の清掃活動に参加することで、自然を残す大切さを実感し、それを広めることができればと思っています。自然とともに生きることの重要性を理解し、その価値を伝えることが、未来の矢祭町をつくる私たち青少年の役割であると考えています。

最後に、矢祭町の魅力を多くの人に伝えるための活動にも取り組みたいです。町の歴史や特産物を紹介するイベント等があれば参加し、多くの人に良さを知ってもらうことで、地域の活性化に貢献したいと考えています。特産品である鮎やゆず、いちごにこんにゃくなど、これらを使った料理のバリエーションを増やすことで食への楽しみ方が増え、結果的に町の魅力の増加につながるのではないかと思います。私は日々の食品科学科での学びの中から、食を通して育った町へ貢献できることがないか考えています。これまで受け継がれてきた自然や伝統、食文化を未来の矢祭町につないでいけるように、楽しんで取り組んでいきたいと思っています。



編集後記

皆様には大変お世話になり、心より感謝申し上げます。おかげ様で多くの方々にご来場いただき、盛会のうちに終了することができました。今後とも変わらぬご協力を賜りますようお願い申し上げます。

令和六年十二月 発行

発行者 矢祭町青少年育成町民会議

事務局 矢祭町教育委員会教育課

